



市川流域の中心都市姫路・世界遺産姫路城（本文中に関連記事があります）

## 目次 / contents

### 人・まち・地域…………… 2

- ・「銀の馬車道」広域ネットワーク連携への展望  
／馬場正哲・若林秀和
- ・生駒山系の新しい魅力について考える／山本昌彰
- ・向こう三軒両々隣り～安心安全の数珠つなぎ～／石本幸良
- ・日本一の梅のまち「みなべ」にコミバス走る／田口智弘

### きんきょう…………… 9

- ・地域の資源循環に取り組む老舗旅館「戸田家」／小泉春洋
- ・新しい冊子ができあがりました！大阪農空間応援 BOOK「農空間物語 VOL.2」～大阪流「農」を楽しむライフスタイルを訪ねて  
／原田弘之
- ・新人紹介／三浦健史

### まちかど…………… 12

- ・看板だってまちの文化財！？／中村孝子



ひと・まち・地域

「銀の馬車道」広域ネットワーク連携への展望  
大阪事務所／馬場正哲・若林秀和

地域再生に向けて、各地で独自性と創造性を活かしていく取り組みが動き出しています。兵庫県中播磨地域では、「銀の馬車道」という明治の文明開化と殖産興業の近代化遺産を活かし、現代の地域ブランドを創造していく取り組みが始まっています。お手伝いさせていただいた中から報告します。

#### 広域連携でイメージ改善が課題に

中播磨地域の北の但馬地域に位置する朝来市の「生野銀山」は、平安時代の大同2年(807年)の開坑と伝えられ、天文11年(1542年)に本格的に採掘が始まりました。その後、織田信長や羽柴秀吉によって治められ、銀を中心とした経済基盤が生まれ、江戸時代にはシルバーラッシュ(大量採掘)がおこり、姫路の飾磨港までの市川流域沿いは大いに栄えました。明治新政府も財政基盤確立のため生野銀山に着目し、フランスの最新技術を導入し、増産に力を入れました。

しかし、昭和44年頃に流域での鉱毒汚染が社会問題となりました。対策協議会を結成し、旧生野町、旧大河内町の農用地土壌汚染地域指定を受け、汚染対策工事に着手し、昭和52年終了しました。この間、鉱山は、昭和48年3月に閉山となりました。

鉱毒汚染は、生野から姫路市に至る市川流域の地域イメージを悪化させ、流域の地域振興が広域の課題となりました。このため、平成8年2月に、当時の姫路市、香寺町、福崎町、市川町、大河内町、神崎町、生野町の1市6町で「市川流域アメニティ推進協議会」が結成され、広域的に連携し、地域間交流でアメニティ豊かな地域づくりに取り組むこととなりました。

#### 明治の「馬車道」を活用したシンボルプロジェクトの始動

平成11年3月に、「市川流域アメニティ推進計画」を策定し、本流域での地域づくりに向け、優れた自然的・社会的・文化的風土条件を手がかりに、①流域づくりのアメニティを高める。②流域のアイデンティティを高める。③流域づくりの主体力を強める、を目標とし、取り組みを進めることとしました。こ

のため、シンボル・プロジェクトとして“銀の馬車道”を軸にした流域づくりが位置付けられました。

「馬車道」とは、明治新政府が生野鉱山を国営化し増産政策の一環で築造した、生野鉱山から市川に沿って飾磨港を結ぶ約49kmの道路で、「生野鉱山寮馬車道」と呼ばれていました。鉱山長であった朝倉盛明とフランス人鉱山技師ジャン・フランソア・コアニエが選んだ技師レオン・シスレーを技師長として当時最新の「マクアダム式」と呼ばれる工法で、3年がかりで建設されました。この「高速道路」は、当時の人・もの・情報を結ぶ地域の基幹軸であり、我が国の近代化を支えた産業と技術とともに国際交流の歴史的、文化的資産といえます。

市川流域アメニティ推進協議会は、この馬車道に着目し、かつ生野銀山の「銀」をかぶせて「銀の馬車道」とネーミングし、県と連携して地域の再発見から取り組みを始めました。経過は次のとおりです。

- ・平成11年度：市川流域の市町紹介、銀の馬車道の概略経路を示したリーフレット作成
- ・平成12年度：馬車道ウォーキングの開催(ひょうご21世紀記念事業)
- ・平成13年度：案内看板(サイン)の設置
- ・平成14年度：小学生向け学習用冊子作成(その後、姫路、生野などで増刷)
- ・平成15・16年度：学習用DVDの作成
- ・平成17年度：銀の馬車道活用懇談会の開催、案内マップの作成、案内看板等の設置
- ・平成18年度：兵庫大学「銀の馬車道探検隊」実施、馬車道発掘調査の実施、案内板等の設置

#### イメージの改善から地域振興へ

この中の学習用DVDは、地域の小学校の郷土学習で活用され、その後地元のCATVで繰り返し放映されることとなり、「銀の馬車道」が番組の「キャラクター」とともに何となくですが地域の周知となって、関心が持たれるようになってきています。

一方、50万都市姫路市は、重工業を基盤とした近代工業都市として発展しましたが、時代がポスト・インダストリーへ進む中で、産業経済とともに社会

構造そのものもソフト社会への変革が求められています。このソフト社会の基盤となるのは地域市民の主体的活力や商業・サービス業なども含めた総合的な地域活力の強化など、地域の活性化とともに、他の地域との交流の活発化が重要となっています。

こうした中で、「銀の馬車道」の取り組みは、流域の大地を共有し、歴史的に文化的に密接に結ばれてきた地域の資源を掘り起こし、地域の自覚を芽生えさせ、「銀の馬車道」独自の「夢」を「つなげ」「集め」「けん引」「発信」する、地域のエネルギーとなることへの期待と予感とが実感として伺えます。

#### ネットワーキング手法の展開

市川流域アメニティ推進協議会は本年度をもって役割を終えることとなりました。「銀の馬車道」プロジェクトは推進役を、中播磨県民局と各市町の連携に委ねることとなります。目標を実現していくためには、①「銀の馬車道」を発信し、②その資源や施設を活かしネットワークして、受け入れ体制を整備、③これを産業に繋げ、④県民参加の仕組みと地域を巻き込む事業の推進や⑤交流事業の展開など、段階を踏まえた継続した銀の馬車道創造の基本戦略が求められます。

#### 市民の巻き込みと主体形成

しかし、「銀の馬車道」はJR播但線や国道312号、播但連絡道路などの開通により、馬車道そのものは埋没して久しく、何ら具体の拠点となるものを持ちません。一方、徐々に地域市民に知られるようにな

り、「銀の馬車道」を銘打った商品まで出回るようになってきました。このような「勝手」な動きが必然的に生まれてきます。これも地域のパフォーマンスの重要な要素と解釈し、これら多様な動きの中から「銀の馬車道」の運動が、いぶし銀の地域づくりに繋げていくことが目標となります。

将来的には、この個々の動きや地域拠点や観光施設などが自主的なネットワーク型組織として、地域市民の自発的な動きとして連携し、多様な「銀の馬車道」活動をマネジメントし、束ねられていくことが求められます。このためには、多様な個々の活動のパフォーマンスの高まりとマネジメントのコアの形成とともに、以下のネットワーキング基盤が求められます。

- ①「銀の馬車道」の理念やモチベーションの共有
- ②プラットフォームな機能（場・機会）の共有
- ③学習の機会の共有
- ④情報の共有

例えば、世界中のプログラマーが、自由に参加し、そのOSを改良したり新機能を追加して構築してきた「Linux」のような、個々が主体となって、ネットワークで「銀の馬車道」づくりが形成されることなどもイメージされます。

まずは、昨年度の懇談会や18年度の県民局事業で兵庫県立大学の宇高雄志先生の研究室が取り組んだ「銀の馬車道探検隊」などの動きがコアとなって実態が形成発信されていくことを願うところです。「銀の馬車道探検隊」<http://ginbasha.blogspot.com/>



大庄屋 三木家（兵庫県指定文化財）／福崎町辻川  
この前の道も馬車道でした



銀の馬車道のキャラクター：ハヤブ（馬）、銀太郎、未来、シルバ



## 生駒山系の新しい魅力について考える

大阪事務所／山本 昌彰

### 生駒山系のフォーラム開催

去る平成18年11月19日（日）と平成19年2月12日（振替休日）、「生駒山系歴史・文化フォーラム」が開催されました。これは、新しい生駒山系の魅力を再発見し、新たな魅力を生み出していくということを目的に活動を行っている「生駒山系歴史文化研究会」（座長：大阪府立大学大学院生命環境科学研究科増田教授）が主催されているものです。

### 生駒山のイメージは？

みなさんは、生駒山というとどのようなイメージをお持ちでしょうか。豊富な自然、美しい夜景、大阪と奈良の間、長いトンネル…。あるいは、少し知っている人は、生駒の神々とか靈感、修験道、歴史的な社寺仏閣などと答えるかも知れませんね。よく六甲山と比較する人も多いようです。

今回の2回のフォーラムでは、その生駒の本当の魅力とは何かについて、いろいろな角度で講演や議論等が展開されました。私見ではありますが、感じたことなどを中心にして、少し整理してみたいと思います。

### 山を隔てた二つの歴史・世界

生駒山系の西側には旧河内湖の河内平野、東側には奈良盆地が広がり、西側では急峻、東側では緩斜面と、西と東では地形も異なり、山の見え方も違います。大阪側から見る生駒山は陰しく壁のようにそびえ立ち、奈良側からは優しく守ってくれている…。こんな地形を利用し、大和朝廷時代には、生駒山南方の高安山頂に、高安城という、唐・新羅の侵攻に備えた城がつけられました。まさに生駒山系が大和・奈良の歴史を防御してきたとって過言ではありませんね。

「守る」といえば、大気汚染もそうです。この“壁”のおかげで大阪と奈良では、その濃度がかなり異なるそうです。奈良に住む私にとって、生駒山は有り難い存在です（笑）。

大阪側にとっても生駒山の存在は大きく、「大阪の都市の一部」といいます。都市には必ず、“縁”が必要で、“縁”で都市の人々は解放され、癒されるといいます。生駒山はその役割を果たしてきたのですね。

生駒山系はこのように、大阪、奈良という全く性



大阪側から見た生駒山系

格の異なる2つの都市を生み、育て、独自の歴史・文化をつくってきたのです。

### 生駒山系の宗教性・神秘性

生駒山周辺には、「鬼取」「髪切山」「暗峠」といった、なにやら少し神々しく、近寄りがたい雰囲気がする地名がたくさん出てきますが、生駒の山々は、これらを理解することで、その漢字の意味どおりに“宗教世界”が広がってくるといいます。例えば、「鬼取」は、「人の魂、霊魂、死んだ人の霊魂（鬼）が集まってくる（取る）山」で、「髪（神）切山」は「亡くなった人の魂のおる山に接した（切る）ところ」を意味しているらしいのです。鬼とは神を意味していたのですね。

「神」といえば、中世の時代、生駒山頂付近に「神感寺」というお寺がありました。仏教なのに「神を感じるお寺」…山の中で修行を積み、神と交流し自分を高める…。役小角の修験道文化…。やはり生駒山は昔から神々が宿る山として崇められてきたのです。「宗教の世界」を越えた「神」の力を感じさせます。

### 自然と人間の営み＝「日本最古の里山」

地形が険しく、“壁”をつくり、神々が住む山。なんだか、「生駒山」ってのは全く人間を寄せ付けないイメージがありますね。しかし、実際は、むしろ

その逆で、生駒山は人との交わりの中でいろいろな文化が生まれている山だといわれます。それが「里山文化」です。

また、生駒山麓には、その発掘遺跡などからかなり昔（石器時代？）から人が住んでいたことがわかっており、その人の生活と生駒の自然は常に深いかわりがあったいいます。まさに生駒山は「日本最古の里山」でしょう。

このように、生駒山は、自然と人の適度なバランスによって保たれ続けてきた山です。多くの観光客に楽しんでいただくのもいいのですが、まず、正しく自然と歴史を理解していただくことが重要だと思います。

### 関連性を編集するイメージーション

結局、生駒山って、自然あり、歴史あり、宗教あり…。一体何が重要と言われれば、多分、全て重要。生駒には、“これしかない”というのではなく、全てのものが関連しながら生き続けている、それが生駒の良さなのかも知れません。

自然、神、寺、人、里山…生駒山では、時代時代に応じて常に新しい仕組みを自然に生み出し、関連させてきました。次はこうした「関連性」をいかにうまく編集しストーリーづけていけるかが課題です。少し『イメージーション』が必要かも知れません。



里山文化のひとつ「棚田」



第1回フォーラムの様子



第2回フォーラムの様子



向こう三軒両々隣り  
安心安全の数珠つなぎ

京都事務所 / 石本 幸良

平成 17 年 2 月から京都市南区の上鳥羽学区での取り組みとしてまちづくり活動に参画していますが、これまでの成果を報告します。

**上鳥羽学区の概要**

上鳥羽学区は南区の鴨川と桂川に挟まれた南部に位置し、国道 1 号など南北東西の都市幹線道路が集中し、事業所や工場なども多く立地する面積の広い学区です。この上鳥羽学区で昨今の子どもを取り巻く痛ましい事件の多発を受け、自治連合会を中心に、小学校、PTA 等が一体となり、子どもの防犯対策・安全教育を展開しています。平成 16 年に児童全員に「防犯ブザー」と「防犯ステッカー」（ランドセルに貼る）を配布、また、「子どもの安心・安全を呼びかける」ビラの全戸配布、ポスターの作成、「上鳥羽あんしん・あんぜん パトロール中」の啓発のぼり旗 100 本を、公園を中心に掲示する活動を行いました。

**地域まちづくりセミナーの取り組み**

平成 17 年 2 月に(財)京都市景観・まちづくりセンターが南区役所の協力のもと、住民主体のまちづくり活動のきっかけをつくることを目的とした「地域まちづくりセミナー」を開催しました。セミナーでは『上鳥羽学区の“寄り道・まわり道・遊び道”を探ります』『上鳥羽学区の“安心・安全の数珠つなぎ”』の 2 回のワークショップを開催、私は立命館大学産業社会学部の講師として学生と一緒に参加しました。

**向こう三軒両々隣りー安心安全数珠つなぎ**

平成 17 年 7 月に地域まちづくりセミナーの成果の報告会を開催し、「安心して暮らせる上鳥羽のまちづくり」に向けた取り組みを提案しました。また、私のゼミが「向こう三軒両々隣りー安心安全の数珠つなぎマップ作成」で、平成 17 年度の「大学地域連携モデル創造支援事業」の選定を受けたこともあり、学区全体でマップづくりの取り組みを開始しました。

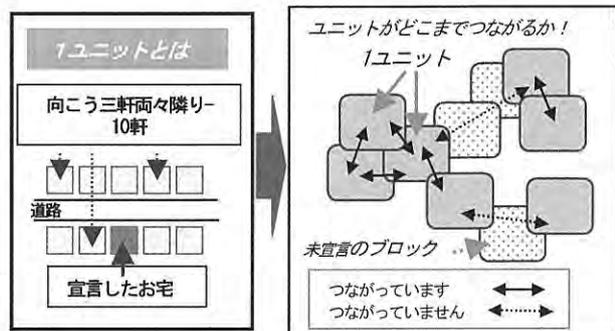


「地域まちづくりセミナーの成果の報告会」

この取り組みはまち全体として、子どもたちや高齢者を暖かく見守り、支えあう地域づくり、区民の互いの目と声かけでつなぐ、安心で安全な上鳥羽のまちづくりを目指したものです。

取り組みの内容は住民の方に「向こう三軒両々隣りー安心安全の数珠つなぎ宣言」をして頂き、宣言したお宅を基点に「向こう三軒両々隣りの 10 軒」を「1 ユニット」として、このユニットを住宅地図にプロットしてつながり度を示す「向こう三軒両々隣りー安心安全数珠つなぎマップ」を作成するものです。お互いの目と声かけでつなぐ、「まちの安心・安全のつながり」の度合いをビジュアルに示すことで、みんなで取り組み状況の確認を行っています。

また、学区内の企業のみなさんには、「安心安全の数珠つなぎ“見守り”宣言」を呼びかけています。これは企業のみなさんにまずは学区に立地する企業として、地域のみなさんの取り組みに連携・協力



「向こう三軒両々隣りー安心安全数珠つなぎの考え方」

していくことを宣言して頂くものです。現在、宣言者数約 300 人、見守り宣言企業数は 40 社になっています。まだまだ学区全体から見ると、数珠つなぎにまでは至っていませんが、まちの北から南へ、東から西へ数珠つなぎの完成を目指して取り組んでいます。

#### あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会の設立

平成 17 年度の子どもの安心安全に向けた様々な活動の取り組みを踏まえ、もっと組織的に、計画的に取り組みを展開することを目的として、自治連合会と各種団体、PTA、小学校などが集まって、平成 18 年 4 月に「あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会」を設立しました。推進委員会では定例会を開催し、各団体の取り組みの相互報告と確認、および新たな取り組みの企画とその行動提起を行っています。

その最初の取り組みとして、子どもの安心安全を守る取り組みの区民への広報を目的に、5 月に「上鳥羽子どもあんしん・あんぜんパレード」と「啓発のぼり旗立て」を実施、区民に協力を呼びかけました。

子どもの見守り活動の新しいアイデアとして、「竹プランターづくり」に取り組んでいます。この取り組みは手作りの竹プランターを玄関先に飾り付け、毎日の水遣りの際に、登下校の子どもの声を掛けることを目的としています。今回は最初の取り組みであり、小学校のおやじの会で約 20 本の竹プランターを学校の校門横の生垣に設置しました。毎日先生方が水遣りをしながら、子どもに声かけされています。

また、七夕の日には子どもたちが書いた短冊の七夕飾りを竹プランター周りに並べ、その足元に竹行灯を並べて、ろうそくに点火をして、七夕の夕べを楽しみました。

平成 18 年度から「小さなおせっかいがこちよい上鳥羽のまち」を目指して、以上のような様々な手作りの取り組みを展開しています。今一度ご近所づきあいを見直し、おせっかいさを復活する



「竹プランター」と「のぼり旗」

ことで、まちの安心安全の地域力の再生を目指しています。

#### 大学と地域と行政がサポートする上鳥羽の取り組み

上鳥羽の事例は地域と行政が連携し、さらに大学の研究・企画力と学生の行動力が加わり、短期間に、地域の行動力が開花しています。地域のみなさんの互いの日常のご近所づきあいの再確認が進むとともに、新たに自治連合会を中心とした各種団体のネットワークの進展に広がっています。私のプランナーとして取り組みテーマとしている、「風の人」と「土の人」の交わりによって、新しい地域の文化が掘り起こされ、新しい「風土」が生まれつつあると実感しています。アイデアの種が地域の行動力と連携力を栄養にして、芽がすくすくと伸びています。「農」が特徴である上鳥羽において、みんなにこちよい香りと色合いの花が咲くように、今はみんなで水のやり方と肥料の入れ具合を確認しつつある段階と言えます。

これからも、私はゼミ生と一緒に、上鳥羽をフィールドにおせっかいなおつきあいを継続していくつもりです。

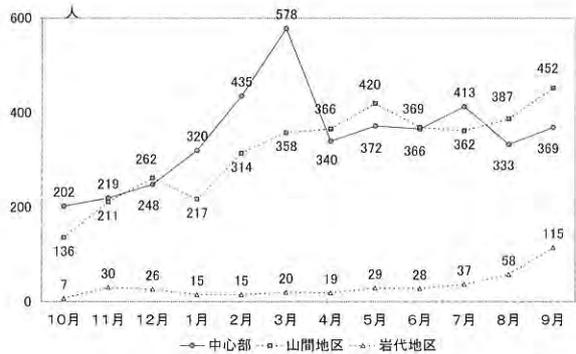


# 日本一の梅のまち 「みなべ」にコミバス走る

大阪事務所／田口 智弘

日本一の梅のまち・みなべ町で平成19年4月からコミュニティバスが本格運行されます。みなべコミバスの実現は、南部町・南部川村合併時の『新町まちづくり計画』において重点プロジェクトの一つとして位置づけられたことに始まります。これを受け、平成17年10月から平成18年9月の1年間に第1期、2期の試行運行を行い（現在延長試行中）、利用状況、利用者の声を踏まえた運行ルート、形態の改善を行いながら、みなべ町におけるコミュニティバスのより良いあり方が検討されました。その上で策定された本格運行案は、平成19年1月の『みなべ町地域公共交通会議』を経て、実現の運びとなりました。私ども大阪事務所は、新町まちづくり計画からコミュニティバス本格運行までの一連の流れをお手伝いさせていただく機会を得ました。

コミュニティバスというと、規制緩和の流れの中でバスとタクシー事業の参入・撤退が自由化された結果、経営が厳しい路線の廃止が進むようになり、代替の交通手段として自治体等がバスを運行を行うケースが多く見られます。しかし、みなべ町の場合は、廃止路線の代替交通ではなく既存の公共交通



みなべバス利用者推移

(JR 紀勢本線、明光バス、龍神バス)と役割分担し、交通空白地区と空白時間帯をカバーし、マイカーを利用できない交通弱者への対応を図ることをめざして検討されてきました。

運行形態は、試行運行をとおして、固定路線方式とデマンド方式の比較を行い、デマンド方式を採用することとなりました。正確には、デマンド・タクシーと呼ばれる形態で、5人乗りあるいは9人乗りのタクシー車両を用い、予約した乗客がタクシーに相乗りします。乗合タクシーとも呼ばれます。

試行運行では、1人の輸送に200円の運賃と1,000円の町負担が必要でしたが、コミュニティバスが運行されることによって、高齢者の外出機会が増加する、外出費用が安くすむ、安心して地域で暮らせる、といったメリットが生まれます。コミュニティバスの有無により外出費用にどの程度差が出るかを試算してみると、路線によっては、費用以上に効果があることが明らかになりました。バスの運行収支は赤字であっても、バスを走らせることによる波及効果が、公的な負担によってバスを走らせる意義を裏付けました。また、バス運行に関する町民アンケートにおいても、バス運行に税金を使うことに対して7割の人が賛意を示しており、町民の理解も得られています。みなべコミバスは、地域が求め、地域が育てる公共交通を目指してスタートを切ります。



## きんきょう

### 地域の資源循環に取り組む 老舗旅館「戸田家」

大阪事務所／小泉 春洋

#### 環境配慮型旅館「戸田家」

鳥羽市は、大阪・京都、名古屋から概ね2時間、伊勢神宮や伊勢志摩国立公園の美しい海などを観光資源として持つ、全国的に有数の観光地です。市内では多くの旅館・ホテル・民宿が経営され、観光産業が鳥羽市の産業の基盤となっています（市内には228の宿泊施設があり、従業者数は市内全体の1/3を占めます）。平成17年度の鳥羽市の人口は約2万4千人ですが、観光客数は約490万人（うち、宿泊客数200万人）で、京都市の観光客数の1/10に達しています。

産業の基盤であることは、言い換えればごみの排出源でもあり、鳥羽市の事業系ごみの約8割強は、旅館・ホテル・民宿、食品卸売業、飲食店、お土産屋等の観光関連業から排出されています。このうちの多くは食品廃棄物（生ごみ）です。

アルパックの大阪事務所では鳥羽市の生ごみリサイクルのあり方について調査委託を受けていますが、その関係で環境に配慮した旅館経営を行う戸田家旅館の取り組みを知ることとなりました。戸田家旅館は、鳥羽市の駅前に立地し、収容者数1,100人を誇り、市内の多くの宿泊施設の中でも大手で老舗の旅館です。ここでは15年ほど前から、環境



卸売業から排出された旅館等への納入食品加工残渣

に配慮した旅館経営に取り組んできており、その取り組み内容についてご紹介します。

#### これまでの環境に配慮した取り組み

戸田家旅館は、伊勢志摩国立公園に立地し、その自然を守るため環境に配慮した取り組みを進めてきています。その取り組みは、平成に入った頃から開始され、平成3年には水質浄化のため浄化槽へカキ殻を投入、平成4年には生ごみ発酵処理機を導入し、地元のみかん畑へ堆肥を提供する取り組みを行っています。さらに平成5年にはコージェ

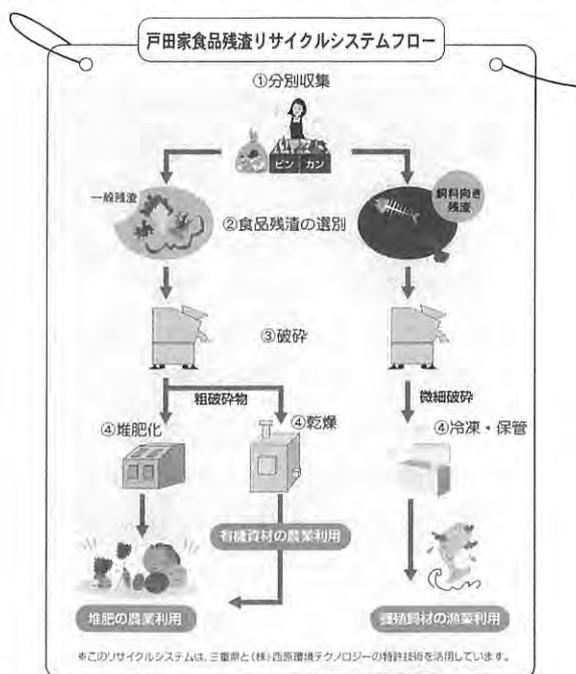


旅館等の洗い場のごみ

ネレーション発電機を導入し、熱は野天風呂の熱源にするなどの取り組みを進め、平成12年にはISO14001を認証取得しました。

鳥羽市の観光客数は年々減少しており、市内の旅館等の経営も決して楽とは言えません。このような状況の中で、経済的なメリットが期待できるコージェネレーションだけではなく、事業者の負担も大きいその他の環境に配慮した取り組みをも積極的に行うなど、環境保全に対する戸田家旅館の並々ならぬ意気込みを感じます。

平成13年以降では、伊勢志摩



戸田家旅館の食品残渣リサイクルシステムフロー 出典：「戸田家」パンフレット



## きんきょう

食品リサイクル研究会を発足し、生ごみを粉碎しミンチ状にして鯛の養殖の餌にする試みも研究しています。さらに、廃食用油から自動車燃料をつくり送迎用バスの燃料としても利用しています。また、生ごみリサイクルフォーラム等に積極的に出展・展示等も行ってきました。

これらの取り組みが評価され、平成16年に三重県から環境功労賞を授与されるとともに、昨年には「高級旅館に泊まって実践エコライフ」という呼びかけで、『市民相互交流による〈学び合いアジアサミット〉』（主催：NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット）も開催されています。

### 地域循環への展開に向けて

戸田家旅館では、生ごみを粉碎しミンチ状にして鯛の養殖の餌とし、その鯛を宿泊客に提供するといった地域循環の構築を目指していますが、安定供給や需要先が未開拓という問題に加え、BSEの発生により飼料安全法にもとづき生ごみから肉類の排除が求められていることなどもあり、一つの旅館の熱意だけで目標を達成できるものではありません。このため、生ごみから飼料づくりに取り組む市内の旅館・ホテル等を増やし、安定的に良質の飼料が供給できるような生産量の調整や技術向上を共

同で取り組む必要があります。さらに、行政による取り組みへの支援や事業費への補助の充実などが、鳥羽市における旅館・ホテル等からの生ごみの飼料化と養殖魚の育成・食材への活用による地域循環構築のための課題です。

**新しい冊子ができあがりしました！  
大阪農空間応援 BOOK「農空間物語 VOL.2」～大阪流「農」を楽しむライフスタイルを訪ねて**

大阪事務所／原田 弘之

大阪府発行の冊子づくりをお手伝いする機会がありました。タイトルは「農空間物語 VOL.2」、サブタイトルは「大阪流『農』を楽しむライフスタイルを訪ねて」ということで、昨今ブームの感がある、定年帰農、田舎暮らし、菜園生活など、団塊世代を中心とした中高年向きの農に関するくらしのガイドブックと思われるのですが、実は中身はちょっと違います。

内容は、大阪をフィールドに、一般の農業ではなく新しい視点、面白い視点から農を「仕事」にしている人を取り上げ、その仕事ぶりや暮らし、思いを紹介しています。

取材した立場から、5組の方について、少しだけご紹介しま

しょう。詳しくは冊子をご覧ください。

### その1：子育てと自己実現を両立する花に夢をかける農家女性

八尾市の花き農家で、女性仲間と一緒に温泉施設に直売所を出して、花を対面販売したり、フラワーアレンジメントにも取り組むなど、忙しいけれど楽しい、まさに「花」のある暮らしをされています。

### その2：地域農業・子どもの食育など一人多役のスーパー農家

河南町のサラリーマン退職後の農家で、来訪者が年間20万人を超える「道の駅」の駅長として、地域経営に貢献する傍ら、自ら耕作して「なにわの伝統野菜」を外食産業と契約栽培したり、毎年都会の子どもたちを受け入れ、食農教育を継続されています。

### その3：農家・非農家が一緒に交流拠点で地元を盛り上げる

貝塚市の馬場地区では、貸し農園や直売所等のある交流拠点ができ、農家だけではなく、企画や経営・経理のノウハウを持ったサラリーマン退職者（非農家）も含めた組織を地域でつくって運営を開始しています。

### その4：自ら栽培も料理もする地産地消レストランの経営

箕面市で、年間100種類以上の野菜を栽培・提供するオーガニックのレストランを経営。若者があこがれるような「食と農業をつな



その5：まず「食べる人が喜ぶ」から発想する若手農家

「はちみつほうれん草」「くり味のじゃがいも」など自分ブランドを構築。野菜は肥料設計等によって、味の開発の余地はまだまだあり、食べる人が喜ぶ顔を想像して野菜をつくり、研究する毎日です。

5人の方々からは、農を楽しむことについてのおもしろい話をたくさん聞かせていただき、私自身、非常に楽しい思いをしました。みな

ぐかっこいい百姓（百の技をもった人の意）」を育てたい。

さん忙しいけれど楽しそう、大変そうだけれど研究熱心、そして何より「笑顔がいい」のが印象的でした。「農の仕事」のあるライフスタイルが大阪から広まる予感がしています。あこがれのくらし方になることを望んでいます。

この冊子は、大阪府農政室などで配布の他、以下のホームページでご覧いただけます。

<http://www.pref.osaka.jp/nosei/book/ukanmonogatari2.html>



## 新・人 紹・介

### 京都事務所／三浦 健史

1月より京都事務所に入所しました三浦健史です。大学院は生活空間学講座というところを出しましたが、生活・空間というものにもっと取り組むべきだったと思われ、それがずっと心に引っかかってきました。

生活空間と言っても幅広すぎるかもしれません。その中から特に気になっていることを3つ挙げてみます。

1つめは地方都市のシャッター

一通り化です。素朴な感情として、とても寂しく思います。地方の活性化に関われたら、と思います。

2つめは、景観についてです。どのような景観がその地域に適するのか、またどのような建築がよいか。合意のこともあり、奥深い問題です。

3つめは、将来の世界像についてで、特にキーとなるのが環境問題です。子どもたち、孫たちが生きる世界をよくしたい、その

ためには今、何をすべきで逆に何をすべきでないか。建築や計画を考えることの根本的な衝動です。

俯瞰的な目を持ちながら、個別プロジェクトに取り組みたいと思います。よろしくお願いたします。





## 看板だってまちの文化財！？

大阪事務所／中村 孝子

最近、車を利用せず、市バスを利用したり、まち歩きをすることが多い。京都のまちを歩いていると様々なデジタルフォントと色の看板があふれている。どれも似たりよったりの印象を受けるけれども、他店よりいかに目立たせるかを競った結果、景観上好ましくないものも多く見られる。これは夜も同じで、まちの防犯面で効果があるかもしれないけれども、チカチカ、ごちゃごちゃして美しいとはいえない。また、他市でも見られる大手企業の看板は、どこにでも見かけるありきたりのまちの景観をつくることになり、まちから「らしさ」がなくなる原因にもなっていると思う。

もちろん京都市の一部の地区では条例で広告や看板の色や形が規制されている。さらに2007年には、条例の改正により屋上の広告物や点滅式照明も全市で禁止される予定だ。

そういう中で老舗の木彫看板などを見ると、「文字」本来が持つ力強さや美しさにハッとさせられる。日本語の書体って本当に美しいものだ。目立つため多少大きく描かれている文字であっても、なんだかしっくりした感じがあっていい。遠目に眺めても美しく見える。

看板は店の顔だけでなく、その通りやまちの景



和菓子屋：有名な書家による看板文字も美しいが、和菓子の木型を使ったデザインも素敵だ。観を彩る重要な要素だと思う。まちなかから老舗がなくなるに伴い、魅力的な看板も姿を消していく。京都では、看板といえども貴重な文化財の一つだと思うのは私だけではないだろう。

さて、私にとって魅力を感じるのには看板の「文字」だけではない。何を売っているかが一目でわかるデザインだ。漆喰、はりぼて、本物の商品を利用したものなど様々あっておもしろい。

実は、何回か通ったことのある道なのに、最近、その存在に気がついたものもある。京都に生まれ、住んでいながら、意外と知らないこともあるものだ。これからは、ほかほかしてまち歩きに最適のシーズンだ。いろいろ探して紙面で紹介できればいいと思う。



自転車屋：錆びた感じの自転車がいい



眼鏡屋：最近、見つけた漆喰のもの



古道具屋：市電が走っていた時分からある

## アルパック(株)地域計画建築研究所

<http://www.arpak.co.jp> E-mail [info@arpak.co.jp](mailto:info@arpak.co.jp)

本社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82

大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 8F

東京事務所 〒186-0001 東京都国立市北 1-1-17 田畑ビル 3F

九州事務所 (株) よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室／TEL(03)3226-9130

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128